

「オイ、喜イヤん、一遍表へ出とおいで」

「何んやいな」

「何んやいなやないで、今日らの日に、家で、ぼんやりと仕事を仕て居る奴が有るか、外へ出て、往來を通る人でも、見てみいな」

「ほんに、仰山人が出るな」

「そら、時候が宜いのに、天氣は宜し、暑うなし、寒うなし、何とも言へんな」

「彼の人等は、いつたい何處へ行くねんやろう」

「それは皆、おもい／＼やがな、東へ行く人も有、西へ行く人もあり」

「彼れ皆、用事が有て歩いてはるのんか」

「そら用事が有て歩いてる人もある、またぶら／＼と花見遊散に行く人もあるがな」

「何んな人が花見遊散に行くね」

「別に、どんな人と言ふて決りは無いが、着物の一つも着替へて、辨當、折、或は瓢箪の一つも提げてる人が、花見遊散に行く人やがな」

「結構やな、あゝして宜い着物を着て、美味物を食ふて、ぶら／＼遊びに行く人があるのに、穢汚物を着て、年中働いて、さう／＼言つてる者も、あるが、人間にも種々區別のあるもんやな」

「オイ、喜イヤん其様事を言ひなや、現世は夢の浮世と言ふて、人間は七轉び八起と言ふねで」

「そうかて、私等は七轉八轉、轉ろび／＼、やな」

「コレ、彼の人等は前世で宜い事を仕て置いたので、今は宜い夢を見てはるね」

「そんなら、お前や、私等は、年か年中魔まじわれて居ると見得るな」

「オイ、そんな心細い事を言ひな、それはそうと、お前、むこうから來る人を知つて居るか」

「どの人や」

「今、八百屋の門を歩いて居る人やがな」

「どの人やね」

「それ、早う見んかいな、今吳服屋の門やがな、それ、風呂屋の前へ來た」

「それを言ふたら解れへんがな、フム、彼の人か、あれ氣狂きまがいか」

「サア、誰が見ても發狂きはまと見へるが、彼れが町内で噂の、ヘンチキの源助と言ふ男や」

「イヤ聞してる、ヘンチキの源助て、彼の男か、變つた風體を仕て依るな」

「見てみ、頭を半分剃つて半分毛が残したアる、着物は胴が綿入で、片一方の袖が帷子かたびらで、片一方の浴衣ゆかたが付けたアるやろ、紺足袋と白足袋を履はいて、高下駄と草履を履はいてるやろう」

「面白い風體を仕てるなア、何處へ行き依るねやろう」